

健康文化

## 作業療法教育の現状と将来

原 和子

年が明けてから、新聞の記事の中に「あいまいな」とか「(芸術の)癒し」といった語彙を見ることが多い。大江健三郎さんのノーベル文学賞受賞記念講演「あいまいな (ambiguous であるが vague ではない) 日本の私」の影響に違いない。(注: ambiguous ; 両意の。多義の。 vague ; はっきりしない。不明瞭な) (早い話であるが、私は今年の「流行語大賞」にこれを推薦しよう!)

思い入れのひとつには、「障害児を持ち、かつてない揺さぶられ方を経験した。…そこから立ち直っていく、いわば作業療法のようにして僕は『個人的な体験』を書いた」という大江さんの講演から、私にとっては作業療法の治癒力にたいして論証してくれた思いを強く感じるせいである。

大江さんは、「息子の耳がよく機能しているのかどうかも、はっきりとわからぬまま」、ご長男6歳の時「野鳥の声の録音に引きつけられているように思い」野鳥の録音テープを子供部屋でずっと再生し続けたとのことである。その結果、ある日、自然の野鳥の声を聞いて、突然、テープの説明と同じように「クイナ、です」と初めての言葉を発したという。その後、ご長男の興味は野鳥の歌からバッハやモーツァルトの音楽に向かい、ついに作曲に至っている。講演の中で「初めのうち、その作品はイノセントな喜びと新鮮な輝きそのものでした。

ところが、さらに作曲を続けるうち、かれの音楽に、私は『泣き叫ぶ暗い魂の声』を聞きとるほかなくなりました。知的な発達の遅れている子供なりの、懸命な努力それ自体が、かれの胸の奥に、言葉によっては探り出せなかった、暗い悲しみのかたまりを発見させたのでした。

しかもその音楽を作る過程において、かれが暗い悲しみのかたまりから癒され、回復に向かっていることはあきらかなのです。私は、芸術の不思議な治癒力について、それを信じる根拠を見いだすのです。(講演要旨より)」と語るが、その治癒過程は、講演の冒頭に引用された「ニルス不思議な旅」の解題に示される、幾つかのレベルに沿っている。つまり、ニルスが自然の中で安息に、だからこそやんちゃなはずら坊主でいられる第1のレベルから、小さくなって鳥の言葉を理解し、雁たちと旅をし、彼らのために戦うことによって、自

らの性格を改造し、無垢な自信にみちた謙虚さを得る第2のレベル、ついに帰郷したニルスが両親に呼びかける最上のレベルの喜び、「お父さん、お母さん。僕は大きくなりました。もう一度、人間に戻って!」。これは、人間の復権を謳うリハビリテーションの過程そのものである。

そして以上の長い前置きから、作業療法の教育の将来を語りたいというのが私の本意である。

### 作業療法教育の現状

医学は「science & art」であるといわれる。scienceについては、特に19世紀初めより産業革命に伴って発展し、中頃には科学的合理的理論の整備がなされる。代表的な理論は、ダーウインの「種の起源」である。この生物進化論の影響は例えば教育学の分野では、ハーバート・スペンサー（1820～1903）による優勝劣敗の教育論や、フランシス・ゴルトンの優生学にも現れ、やがて一般に広く浸透した形での社会進化論となり、適者生存の理論が当然行き着くようにナチズム、アリア民族至上主義につながる。社会福祉をやめるべきだ、戦争は弱肉強食の世界において当然だというわけである（村上陽一郎、横山輝雄の「進化論とイデオロギー」についての対談から一部要約）。2度の大戦を経て、高い代価を払ったはずなのに、科学に匹敵する信仰を人々は見いだせていない。

医学モデルはこの過程で科学的合理的理論を常にリードしてきたが、量子力学のような物理学を頂点とする（上述、対談から）科学信仰のヒエラルキーのなかでは、専門分化された狭い範囲の発言にならざるを得なくなり、一般の広い期待には答えられなくなってしまった。science & art といっても、art は science と対等どころか、science にくつついた尻尾のように影が薄くなってゆく。

作業療法は、医学モデルのなかでも art に大きな比重を持つ領域である。人道療法、モラルセラピーと称せられる作業療法の源流は、医学モデルが科学的合理的理論に傾倒するにつれすっかり途絶えてしまったかのように見える。精神病の患者に拘束ではなく、カタルシスのために森で木を切らせたという、いわば作業療法の先人の1人であるシュバイツァー博士は、ノーベル医学賞ではなく平和賞であったし、彼の協力者であった野村博士は帰国後、結核の作業療法に尽力したが、医学者としてよりも職業訓練や授産所づくりに功績のあった社会事業家として認められているのではないだろうか。現状の医学モデルの中で、作業療法を語るのははなはだ肩身が狭いというものである。

作業療法教育はそれでも、消えることなく守られてきた。その内容の多くを科学的合理的理論に裏付けされた医学モデルに置き換えられてきたとはいうも

のの。

### 作業療法教育の将来

冒頭で引用したように、art が science に匹敵するような医療としての貢献力を持ちうるかという答えを、大江健三郎さんは示してくれた。それ故に art を媒介とする作業療法は、その教育において、science と同等に art をさらに深く学ばねばならない。大江さんにとっては、それは小説を書くことによってであったし、ご子息の光さんにとっては音楽であった。art は単なる美学ではなく、人類が抱える障害、壁を乗り越える時に、その度に新たに体験する会得、与えながら得るといふ共感であって、きわめて「個人的な体験」によるものと言える。作業療法を学ぶには、学生自身がこのような体験を通して、壁を乗り越え、この先出会うリハビリテーション過程における障害者と共感できる感性を会得しておく必要がある。art に代表されるヒューマニズムやモラルは、「あいまいな」、つまり多義的で、不思議な芸術の治癒力を持つとはいうものの、さきの時代にはそれ故に権威の道具とされてしまった危うさをもつ。このような危うさができるだけ排除し、これからは医学モデルの中に、ひとつのアイデンティティーとして確立しなければならない。と同時にそれによって、医学モデルはさらに幅広い期待に答えられる豊かな学問となるだろう。

作業療法における人道療法やモラルセラピーの流れは、途絶えたわけではなく、アメリカの南カリフォルニア大学を初め、各大学の作業療法学科で試みられているような総合的な人間論、システム論として、「人間作業モデル」のような形で文化人類学を統合しながら発展しつつある。高度な文化・文明を持った人間は他の生物とは違った経済・産業現象をおこしており、今までの科学では語れない人間理論を、art を含めた学際的な展望から確立してゆく必要があるだろう。

(名古屋大学医療技術短期大学部助教授・作業療法学科)